道徳的行為の契機としての音楽の無関心な美
—スタール夫人のカント解釈における道徳と音楽—
The Disinterested Beauty of Music as a Catalyst for Moral Action
Morality and Music in Madame de Staël's Interpretation of Kant

小沢　史門
KOZAWA, Shimon

摘要

The German philosopher Immanuel Kant had a decisive influence on the main themes and concepts of the early French Romantic writer Madame de Staël's thinking. She formulated her own theories of morality and art in dialogue with Kant. It is in *De l'Allemagne* (*On Germany*) that Madame de Staël considers Kant's philosophy as the impetus for a renewal of French philosophy and spirit. She shows particular interest in the concept of "disinterest" presented by Kant in his critical works, and in *De l'Allemagne*, she develops a moral theory based on this concept. According to Madame de Staël's view of humanity, two principles govern human behavior: the senses and the soul. The former is influenced by the external world, while the latter is a universal function inherent in humans. A genuinely moral act is one that stems from internal and universal feelings ingrained in the soul, rather than external motives of interest and utility. Madame de Staël, however, does not completely align with Kant's moral theory. While Kant asserts that the moral law serves as the motivation for moral actions, she emphasizes the importance of spontaneous feelings of duty. Additionally, she contends that Kant's moral theory does not require a religious dimension. In Madame de Staël's perspective, it is religious sentiment that serves as the wellspring of moral actions, describing this inner divinity as enthusiasm. Similarly, disinterest also shapes Madame de Staël's perspective on art and enables her to connect morality with art. Like desirable morality, ideal beauty cannot be associated with sensory pleasures, nor can it be a mere imitation of the physical world. Music, being the noblest of the arts, does not imitate anything; therefore it resonates within the depths of humanity. Only those who have something divine within them that makes possible the enjoyment of beauty and moral conduct because of the same reason, can resonate with music. In this sense, the disinterested beauty of music serves as the catalyst for moral actions.

キーワード：*スタール夫人　カント　音楽*
Keywords: Madame de Staël, Kant, Music

1．序論

『ドイツ論』の著者であるスタール夫人がドイツの文学や哲学から多大な影響を受けたことは周知の事実だが、とりわけイマヌエル・カントの哲学の発見は、彼女の思想形成に重大な影響を与えたと言える。フランス自由主義研究の泰斗であるリュシアン・ジョームは、「まさしく衝撃的なカントの発見」がスタール夫人の自由主義思想の発展における「正真正銘の転換点(1)」であると述べているほどである。実際に彼女の諸作品の中で言及される多くの著述家の中でも、カントの占める位置は際立っている。とりわけ『ドイツ論』の第三部「哲学と道徳」において展開される道徳論において、カントの著作が議論の鍵となっている。

実のところ、スタール夫人によるカント哲学の解釈には異論の余地がある。現代の読者であれば、彼女のカント哲学の理解の不正確さを指摘することは容易いだろう。例えばカントが問題にしたような自然美と芸術美の相違に関しては、スタール夫人は注意を払っていない。しかし本論文の扱う対象はあくまでスタール夫人の思想である。そのためスタール夫人のテクストとカントのテクストの詳細な比較検討は目的としない。むしろ、ピーエル・マシュレが指摘したように「スタール夫人はカントを正確に解説したというより、むしろ独自の創造を行った(2)」のならば、カントの議論を解釈することによってスタール夫人がいかに自身の思想を展開したかを問題とすることが求められるだろう。

スタール夫人の道徳論におけるカントの影響に関しては、先に挙げたジョームの議論をはじめとして、また日本でも自由主義という政治思想の観点から論じられてきた(3)。ところが、彼女のカント哲学に対する関心は道徳論のみにとどまるものではなく、美学にまで及んでいるという点は無視できない。しかも道徳と美学がカント由来の「無関心」という概念を介してスタール夫人の理念の中核において結びついているとさえ言える。そのためスタール夫人によるカントの受容を改めて問題にすることによって、これまで論じられてきた彼女の道徳論を美学というもう一つの論点から補完することができるだろう。

本論文ではスタール夫人の美学の中でも特に音楽を問題にする。なぜスタール夫人によるカント哲学の解釈がとりわけ音楽の問題にも直結するのだろうか。『ドイツ論』のテクストの校訂者アクセル・ブレシュケが指摘しているとおり、スタール夫人の音楽に関する記述を読むと、彼女がイタリア音楽の愛好家であり、それゆえ器楽よりも声楽に価値を置いているということがわかる。しかしスタール夫人はカントの『判断力批判』における「無関心性(désintéressement)」の理論を指針としつつ、音楽を参照することによって、ただ快のみを目的として追求する美学を構築してもいる(4)。この点は逆説的である。というのも、声楽曲は必然的に意味を持った歌

詞を伴うため、音楽の純粋な快を体現しているようには思われないからである。実際に、19 世紀ドイツの音楽思想では、特定の意味に規定されない純粋な器楽が「絶対音楽」として称揚されることになる(5)。本論文ではこの逆説に対する十全な説明を与えることはできないが、彼女が芸術の代表とみなした音楽の性質を明確にすることによって、彼女の美学的理念における音楽の意義およびその道徳的側面を明らかにすることができるだろう。

２．スタール夫人の思想におけるカント哲学の意義

本章ではまずスタール夫人の主要な著作である『ドイツ論』においてカントにどのように言及されているかを簡潔に確認する。続いて、彼女がカントの哲学の中でもとりわけ道徳論と芸術論を重視しているということを確認したうえで、彼女がカントの議論のいかなる点に意義を見出したかを論じる。

2．1．　『ドイツ論』とカント

スタール夫人が自らの著作でカントの名前に初めて言及したのは 1800 年に出版された『文学論』においてであるが、この著作ではカントの哲学の内容が詳細に検討されているわけではない。その後、政治と宗教の問題を扱った小説『デルフィーヌ』の発表を理由にナポレオンはスタール夫人の言論活動を警戒し、彼女は最終的にドイツに逃れることになる。この機会にスタール夫人はドイツの文化人と交流し、ドイツの文学や哲学に関する知識を吸収した。その成果は 1810 年に発表される彼女の思索の集大成である『ドイツ論』として結実することになる。

スタール夫人がカントについて詳細に論じるのは『ドイツ論』の第三部「哲学と道徳」においてである。その中でもカントの名がタイトルに現れているのは第六章「カント」および第七章「カント前後の最も著名な哲学者たち」である。また他の数多くの章でもカントの名が繰り返し言及されていることからも、この著作におけるカントの占める重要な位置が窺える。

スタール夫人の思想におけるカントの重要性を確認するために、『ドイツ論』の執筆の動機を確認しておこう。同書において彼女は単にドイツ文化を目論んだだけではなかった。むしろそれはフランス文化を相対化するような眼差しを伴っていた。スタール夫人は『文学論』の時点ですでに、ヨーロッパ諸民族の気質の多様性に多大な関心を寄せていた。この問題意識から必然的に導き出されるのは、ヨーロッパの複数の文化のうちの一つに過ぎないフランス文化の普遍性を主張することはできないということである。とりわけ「フランス人とドイツ人は精神的連鎖の両極端に位置している(6)」とスタール夫人は考えている。それにもかかわらず「ドイツの知的な側面はフランスではほとんど知られていない(7)」。そこでスタール夫人は『ドイツ論』において、ドイツ文化を軽んじて文化的閉鎖状況にあるフランス人を戒め、「今やフランス精神そのものが、より力強い樹液によって刷新される必要がある(8)」と説いた。

スタール夫人はとりわけ 18 世紀フランス哲学に厳しい目を向けている。彼女は「フランス哲学」という章で、「前世紀のフランスの著述家たちが非常に力を込めて説いた、利害に基づく道徳」と、「我々のあらゆる観念を感覚に帰する形而上学」を「有害である[9]」と断じる。とりわけドルバックに関しては、ロックを通じてコンディヤックがフランスに持ち込んだ経験哲学を発展させ、「世界と人間を暗黒へと突き戻した[10]」と激しく非難している。そこで 18 世紀のフランス哲学と対置されているのが、「17 世紀の偉大な先達たちが示した形而上学の方向[11]」である。ここで形而上学の手本として挙げられているのがデカルト、パスカル、マルブランシュそしてライプニッツだが、カントはその後継者であるとされる。つまりカントはフランス哲学が進むべきであった道の帰着点に置かれている。

2．2．道徳と美学をめぐる無関心

ではスタール夫人はカント哲学のいかなる点に興味を惹かれたのだろうか。彼女はカントの主要な著作である三つの批判書をそれぞれ論じてはいるが、彼女の関心には明らかに偏りが見られる。彼女は『純粋理性批判』の科学的で難解な書き方を「大きな誤り[12]」と断じる一方で、『実践理性批判』および『判断力批判』に関しては熱烈な調子で感嘆の念を表明している。

> 芸術に関して、そしてとりわけ道徳について語るとき、彼の文体はほとんど常に非の打ちどころがなく明快で、エネルギーに満ち、簡潔である。そのとき、彼の教えは何と素晴らしく見えることだろうか！なんと見事に美の感情と義務への愛を表明していることか！なんと力強くそれら二つをあらゆる利害や有用性の打算から切り離していることか！行為を成功によってではなくその根本によって高貴なものとみなしているのだ！つまるところ、人間をそれ自体として論じるにせよ、外界との関係から論じるにせよ、カントは人間に計り知れない道徳的偉大さを付与したのだ。天からの追放者、地上における囚人である人間、追放者としてかくも偉大で、囚人としてかくも哀れな人間に！[13]

以上の記述から、カント哲学の解釈者としてのスタール夫人の関心は美学、そしてとりわけ道徳にあることがわかる。美および道徳が「あらゆる利害や有用性の打算」から自由である という論点は、カントの『実践理性批判』および『判断力批判』で展開される「関心・利害（Interesse, intérêt）」に関する議論に対応している。経験に依存しない純粋実践理性の存在の証明を目的とした『実践理性批判』では、カントは個人の経験的な関心ではなく純粋理性の関心に基づく定言命法の原則を提示した[14]。また『判断力批判』では、美に関する趣味判断には個人の欲求能力と結びついた関心が欠けているということ（いわゆる「趣味判断の無関心性」）述べられている[15]。

2．3．道徳論における観念と感覚の対立

ではなぜスタール夫人はこの関心・利害に関する議論を、人間の尊厳に関わる問題として重視したのだろうか。スタール夫人の哲学的議論は、観念論と感覚論の対立という近代哲学の重要な問題をめぐって展開する。彼女が再構成するカントの議論も、この対立の中に位置付けられることになる。

まずスタール夫人は人間には二つの本性、すなわち感覚と魂が存在すると認める。感覚とは外的世界を経験によって受け取る働きであり、魂とは人間に内在する自発的な活動の源である。スタール夫人は感覚と魂を相反するものだとはみなすのではなく、むしろ「我々の魂をまさに太陽のように中心に据え、外界のものが円を描いてその周囲を周り、そこから光を受け取るようにしなければならない(16)」と主張する。つまり、感覚と魂は両立するが、あくまで魂が人間の活動の中心であるべきだということだ。

カントの哲学は彼女のこの要請を満たす存在として描かれることになる。「このような大きな不確実性の中で省察がさまよっていたとき、カントは感覚と魂の、外的世界と知的世界の二つの帝国の限界を引こうと試みた(17)」。そして彼は「人生の仕事は外界からやってくる知識に基づいた我々の生得的な能力の行為に他ならない(18)」と考えた。以上のように、スタール夫人の再構成した『純粋理性批判』の議論においては、感覚と魂が人間の活動の両輪とされている。

それに対して『実践理性批判』で展開された道徳論に話題が移ると、感覚は倫理の基盤としては非常に不安定で敬意に値しないものとなる。「良心が感覚によってもたらされるのだとしたら、それは感覚によって窒息させられかねない。また義務の尊厳が外界の事象に左右されるのだとしたら、それは堕落したものである(19)」。そのため、道徳の根拠として据えられるべきは、感覚を通じて与えられる外界の事象ではなく、人間の魂に内在する能力なのである。「悟性の法則も、道徳的自由も、良心も、経験によって我々にもたらされるものではない(20)」。つまり「人間の行為が真に道徳的であるのは、その行為の幸福な結果あるいは不幸な結果を無駄に気にかけない場合のみ、行為が義務から発せられた場合のみである(21)」。このような道徳論は「すべてを個人的な利害に結びつけて道徳をひときわ無味乾燥なものにしてしまった(22)」フランスの哲学者たちへの批判でもある。以上のように、カント哲学の解釈者としてのスタール夫人は、利害や有用性という外界から与えられた制約に従うのではなく、被造物としての人間がその魂に生来宿している内的な感情に従うことこそが、人間の尊厳だと論じているのだ。

3．カント哲学から〈精神の高揚〉へ

前章ではスタール夫人がとりわけカントの道徳論および美学における「関心」に関する議論を重視していることを確認した。ところがスタール夫人はカントの道徳論に完全に賛同の意を

示しているわけではない。むしろ宗教の扱いに関する議論に対しては異論を述べている。そしてこの道徳と宗教の関係という論点こそが、スタール夫人の提示する〈精神の高揚〉という理念の中核に関わる。

3．1．道徳の基礎としての宗教的感情

スタール夫人は『ドイツ論』を執筆する以前の 1807 年に、『コリンヌまたはイタリア』という小説を発表している。副題にイタリアという国名が選ばれているとおり、小説の舞台はイタリアであり、主人公はイタリアの女性詩人である。それでもこの作品には著者のドイツでの経験が色濃く反映されている(23)。この小説ではカントの名前こそ言及されてはいないものの、「あるドイツ人哲学者」の言葉として、カントの『実践理性批判』の有名な一節が引用されている。

> あるドイツ人哲学者は言いました。「私はこの世で美しいものは二つしか知らない。我々の上にある星空と、我々の心の中にある義務の感情だ」。実のところ、創造のすべての驚異はこの言葉に集約されているのです(24)。

この引用文とカントの文章を見比べてみると、一つの興味深い相違点が確認できる。スタール夫人が「我々の心の中にある義務の感情(le sentiment du devoir dans nos cœurs)」と書いた言葉は、『実践理性批判』では実際には「私のうちにある道徳法則(das moralische Gesetz in mir)(25)」と書かれている。カントが『純粋理性批判』において「きみの意志の準則が、つねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ(26)」という定言命法を提示したとおり、「道徳法則」とは、純粋実践理性のはたらきから導き出される、すべての人間に対して普遍的に妥当する法則である。ところがスタール夫人はこの客観的な「道徳法則」を「義務の感情」という言葉で置き換えてしまっている。

「道徳法則」と「義務の感情」の混同は、『実践理性批判』の議論と照らし合わせてみても、カント哲学に対する無理解によるものということができる。カントは「道徳性(Moralität)」と「適法性(Legalität)」を区別した上で、「行為に帰属する倫理的な価値のすべてにとって本質的なことがらは、道徳法則が直接に意志を規定することに帰着する(27)」と述べている。「意志規定が道徳法則に適合してなされるとしても、[...]感情を介してのみなされ、しかも感情が前提とされなければならないのが、そのことで道徳法則が意志をじゅうぶんに規定する根拠となるためである(28)」とするならば、「行為は適法性をふくんでいるとしても、道徳性はふくんでいない(29)」ということになる。つまりカントにとっては、真に道徳的な行為には「感情(Gefühl)」は介入しないのである。それにもかかわらず、スタール夫人は『ドイツ論』においても、「カントは、義務の感情が精神的存在としての必要条件であり、人が人生から教えられるいかなる真理よりも先に存在したということを立証しようとした(30)」と、「義務の感情(sentiment du

devoir)」という語を用いてカントの意図を説明しようとしている。確かにカントは「道徳法則に対する尊敬の感情[31]」という意味での「道徳感情(moralische Gefühl)」を論じてはいるものの、感情はあくまで道徳法則に先立って道徳的な行為の動機となるものではない。以上のような食い違いは、『実践理性批判』の解釈者としてのスタール夫人の関心を所在を明らかにしている。つまり彼女は道徳法則という客観的かつ厳格な道徳原理ではなく、個人的かつ内心的な感情を道徳的行為の源泉として重視している。

これまで確認してきたスタール夫人のカント解釈からは、議論の要点の変動が見られながらも、彼女がカントの道徳論を基本的に肯定していることが伺える。ところが道徳における宗教の意義に関する議論となると、スタール夫人はカントに対して異論を述べ、ヤコービら「カントに劣らず徳が高く、性向としてより宗教に近づいているドイツ人哲学者たち[32]」に賛同する。「カントは、死後の生を見込んで行動することは道徳の純粋な無私無欲(la pureté désintéressée de la morale)を損なうことだと主張したが、この点に関しては他の多くのドイツ人の著述家たちが完璧に反駁している[33]」。その上でスタール夫人は「いかなる努力を払ってでも、宗教が道徳の真の基礎であるという認識に立ち戻る必要がある[34]」と断言する。しかもここでスタール夫人が問題としているのは、制度としての宗教ではなく、「宗教的感情(sentiment religieux)[35]」である。つまりスタール夫人にとって、道徳の源泉にあるものは個人の利害に基づかない「義務の感情」であるが、そのような「利害に基づかない(désintéressé)ものはすべて宗教的[36]」なのだ。

3．2．内なる神、または「精神の高揚」

前節ではスタール夫人がカントの道徳論における感情の問題を重視しつつ、そこには宗教性が欠けていると批判したことを確認した。ところでスタール夫人は、道徳の源泉としての宗教的感情を描写したものとして、セネカの『ルキリウスへの手紙』からの一節を引用する。「有徳の人間の胸のうちには、いかなる神かはわからないが、神が宿っている[37]」。このような人間のうちに宿る神という理念は、スタール夫人の理論の鍵となる「精神の高揚(enthousiasme)」と深く関わっている。

まずこの概念がスタール夫人のとっていかに根本的な問題であるかを確認しよう。この単語自体は1795年の『フィクション試論』で用いられているが、重要な意味を付与されたのは『コリンヌ』においてである。この小説では、精神の高揚は主人公コリンヌの卓越した性質を描くために頻繁に用いられている。そして『ドイツ論』では、この概念には格別の地位が与えられている。というのも、同書を締めくくる第四部のタイトルが「宗教と精神の高揚」であり、またその最後の三つの章はそれぞれ「精神の高揚」、「精神の高揚が知性に与える影響」、「精神の高揚が幸福に与える影響」と題されているのである。

精神の高揚とはいかなる意味を持つのだろうか。スタール夫人自身が述べているとおり、こ

の語の起源は古代ギリシャに遡り、その語義は「神が我々のうちにあること(Dieu en nous)[37]」である。プラトンの『パイドロス』などにも用例があるとおり[39]、これはもともと神に憑かれた状態を意味した。18 世紀には、この概念は主に狂信に関する問題として論じられていた。たとえばシャフツベリーが「熱狂に関する書簡」を執筆したのは、18 世紀初頭に迫害を逃れてフランスからロンドンに逃れたフランス預言派の活動に応答するためだった。またヒュームは「迷信と熱狂について」という論において、迷信と並んで「熱狂(enthusiasm)」を「本物の宗教の腐敗・堕落のきわめて有害な結果[40]」と断罪している。ところがスタール夫人はこの語に付与された「狂信」という否定的な印象を払拭しようとする。「多くの人々は精神の高揚に対して先入観を抱いている。彼らはこれを狂信と混同しているのだ[41]」。その上でスタール夫人は精神の高揚を「美への愛、魂の高揚、献身の喜び(l'amour du beau, l'élévation de l'âme, la jouissance du dévouement)[42]」だと説明する。

スタール夫人が「精神の高揚」に付与した意味は、彼女がカントの読解を通じて展開した道徳の源泉に関する問題と対応していると言える。彼女が道徳の基礎としたのは宗教的感情であったが、彼女はまたそれを以下のようにも説明している。「意志の源はより高尚な(élevé)ものでなくてはならない。また、人は心のうちに、個人的利益を犠牲にしても構わないという感情を持っていなくてはならない[43]」。第一章で確認したとおり、彼女はカントの「無関心」に関する議論の紹介を通じて、私利私欲に基づかない道徳を説いた。彼女が精神の高揚を説明する際に言及した「献身」とは、言うまでもなく無私無欲な行いであるであるが、また同時に宗教的な至福をもたらすものである。「我々が不滅を願う気持ちは、他人の幸福のために身を捧げるときに感じる幸福と同様に、無私無欲なものである。というのも、宗教的至福は自己犠牲に始まるからだ[44]」。そして、スタール夫人は人をそのような道徳的行為に駆り立てる宗教的感情を説明するために、まさに言葉の成り立ちからして「精神の高揚(enthousiasme)」と通底する「内なる神」に言及したセネカの言葉を引用したのだった。このようにスタール夫人の精神の高揚という理念は、彼女がカント哲学の読解および批判を通じて展開した道徳の源泉としての宗教的感情という観念が対応している。

4. 道徳的行為の契機としての音楽

前節まではスタール夫人によるカントの道徳論の解釈および精神の高揚との関係を論じてきた。しかし、すでに確認したとおり、カント哲学の解釈者としての彼女の関心は道徳だけではなく、美学にも及んでいる。そればかりでなく、彼女による精神の高揚の説明には「美への愛」も含まれていたということを思い起こしておく必要がある。そこで本章では、スタール夫人が理想的な美と考えた音楽に関する記述を辿ることによって、音楽芸術の道徳的意義を明らかにする。

4．1．功利主義と模倣論の否定

スタール夫人の芸術観が明示的に展開されるのは『ドイツ論』第三部の第九章「ドイツの新たな哲学が文学および芸術に与えた影響」においてである。この章では道徳論の場合と同様に、カントを引き合いに出すことによって功利主義が否定される。

> カントは美と有用性を区別し、美の本性は教訓を与えることではないということを明確に証明した。おそらく、すべての美しいものは寛大な感情を生み、その感情は美徳を呼び覚ますものだ。ところが、道徳的教訓を明確にすることを目的とした途端に、芸術の傑作が生み出す自由な印象は必然的に破壊されてしまう。というのも、目的とは、どのようなものであれ、認識されてしまうと想像力を制限し妨げてしまうからである(45)。

ここで表明されているのは、第二章でも言及した「美の無関心性」である。つまり、芸術の美に付随した経験的な有用性は、「感情」や「印象」、「想像力」といった人間の内的な働きを制限してしまう。

以上のような功利主義的な芸術観の否定は、模倣論の否定に直結する。というのも、模倣は外界の事物の再現に過ぎないからである。

> 芸術から受け取る印象は、何らかの模倣がもたらす快楽とはいかなる関係も持たない。人間は魂のうちに、現実の事物が決して満足させることはない生来の感情を持っている [...](46)。

「自然の美がどれも何らかの方法で私たちの役に立つ(47)」のならば、その自然を模倣したものも、単に有用性に規定されたものにすぎない。それゆえ、理想の美は目的に規定されたものであるべきではない。

以上のような芸術観は、理想の美を消極的に規定するものである。それでは、目的から解放された美を理想的なものだとする根拠は何に見出されるだろうか。スタール夫人は以下のように説明する。

> 目的のない美より、我々の生を維持するために役に立つものの方が尊さを持たないのはなぜだろうか？それは美しいものは我々に不滅で神的な存在、その思い出と哀惜が同時に我々の心の中に生きているような存在を思い起こさせるからだ(48)。

人間の行為が問題である場合と同様に、目的は外的な状況に依存するものである。それとは対照的に、真に美しいものは関心による規定に左右されず、普遍的なものである。それゆえ普遍的な理想美は人間の内に存在する「不滅で神的な存在」と呼応する。

4．2．音楽の無関心な美と精神の高揚

これまではスタール夫人が芸術一般に関して論じた部分を読解した。ところが彼女は芸術全般を等しく論じているわけではなく、このような個人の関心による規定を離れた理想的な美のモデルを「芸術の筆頭である音楽(49)」に見出している。それでは音楽はいかなる点で特権的に扱われるべきなのだろうか。

まず音楽は模倣の原理に基づくものではない。「音楽は何を模倣しているというのだろうか？(50)」音楽は何も模倣していないがゆえに、限定的な目的を伴う有用性からも自由である。「ただ音楽のみが高貴な無用のものである(51)」。そしてその目的の不在のゆえに、音楽は魂に働きかけることができる。「目的から離れていればいるほど、音楽は我々の思いの内的な源に近づく(52)」。このように、関心を欠いた美としての音楽は、単に感覚を通して経験されるものではなく、人間の内奥に肉薄するものである。

以上のような理想的な音楽の美は、まさに精神の高揚という気質と分かち難く結びついたものでもある。

> 精神の高揚への性向を持たない人々にとって、音楽はあるだろうか？彼らは習慣によって調和のとれた音を必要なものとし、それを果物の味や色とりどりの装飾のように享受する。しかし、夜中に歌あるいは人間の声に似た楽器によって静寂が乱されたとき、彼らの存在全体は竪琴のように鳴り響いたことはあるだろうか？彼らはそのとき、我々の二つの本性、すなわち感覚と魂を同じ一つの喜びに混ぜ合わせるこの感動の中で、存在の神秘を感じたことがあるだろうか？(53)

音楽はいかなる場合でも精神の高揚と関わるわけではない。ここで言及されている「精神の高揚への性向を持たない人々」が音楽を必要とするのは、「習慣」という外的な要因からであり、決して内発的に音楽に反応しているわけではない。しかし、もしある人間の魂の内部に神的な存在が息づいている場合は、その人間の心それ自体が楽器のようになり、自発的に音楽と共鳴する。

理想的な音楽はただ精神の高揚への性向を持った人々に得意な感動を与えるだけではない。音楽が神的なものを魂に宿した人間と共鳴するとき、その人間は道徳的な行為へと突き動かされるのだ。

> 言葉はないが調和があり、力はないが抗うことのできないたった一つの声が、我々の心のうちにある神の存在を叫ぶ。人間のうちの真に美しいものは全て、人間が自身の内部で自発的に感じるものから生まれる。あらゆる英雄的な行為は道徳的な自由によって生じる。神的な意思に自らを捧げるという行為、あらゆる感覚が反発し、精神の高揚のみが呼び起こす行為は[...]高貴で純粋なものである(54)。

ここでの「言葉はないが調和があり、力はないが抗うことのできないたった一つの声」は、明示的に音楽を表しているとは言えない。「調和(harmonie)」という言葉がかろうじて音楽を連想させるのみである。ところが先の引用中にあった「歌あるいは人間の声に似た楽器」という記述と照らし合わせると、ここでも声をモデルとした音楽が想定されていると解釈できる(55)。つまり、神的なものを魂に宿した人間が声に類する理想的な音楽の美を聞き取るとき、その人間は無私の境地に至り、道徳のために自らを捧げることになる。こうして個人の関心を離れて聞き取られた音楽は、道徳的行為の契機となるのだ。

5. 結論

これまで、スタール夫人がカント哲学の解釈を通じてどのように道徳論と芸術論を展開したかを論じてきた。そして、理想的な道徳的行為も理想的な美も、感覚を通じた外界の事象の経験によってもたらされる個人的関心に左右されるものではなく、人間の魂に内在する神的な永遠不変の働きを源泉としているという点で通底しているという点、また芸術の中でもとりわけ音楽が人間の神的な性向との親和性を保ち、それゆえ道徳的行為の契機となることを確認した。

本論文では、スタール夫人によるカントの解釈を問題にしたということもあり、検討するテクストは彼女の思想が体系的にまとめられた理論書である『ドイツ論』とした。しかし小説『コリンヌ』もまた、精神の高揚および音楽が中心的主題を成している。音楽との共鳴が道徳的行為の契機であるという本論文の主張は、この小説の読解を通じても正当化しうるものであろう。またそればかりでなく、第四章で読解したような『ドイツ論』において描かれた抽象的な理念としての音楽とは異なり、この小説では様々な種類の音楽が登場している。そのため『コリンヌ』における音楽の美を『ドイツ論』における芸術理論と照らし合わせることによって、彼女の思想における道徳と芸術の関係の内実をより正確に明らかにできることが期待できる。とりわけ声楽、器楽、そして音楽芸術との関係において詩がそれぞれいかなる点において固有の道徳的意義を持ちうるのかを問題にすることができるだろう。

【付記】本論文におけるスタール夫人の著作からの引用は、Honoré Champion 版のスタール夫人全集によるものである(『ドイツ論』: *De l'Allemagne*, série I, tome III, 2017、『コリンヌ

またはイタリア』: *Corinne ou l'Italie*, série II, tome III, 2000）。引用の際には拙訳を用いた。なお『ドイツ論』の訳出の際にはエレーヌ・ド・グロート、梶谷温子、中村加津、大竹仁子による既訳（鳥影社、全三巻）を参照した。またカントの『純粋理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』に関しては、作品社から刊行されている熊野純彦による邦訳を参照し、引用の際にページ番号を示した。

注

（1）Lucien Jaume, *L'individu effacé ou le paradoxe du libéralisme français*, Paris, Fayard, 1997, p. 26.
（2）例えば安藤隆穂『フランス自由主義の成立――公共圏の思想史』、名古屋大学出版会、2007 年、p. 222-236、工藤庸子『評伝スタール夫人――』、東京大学出版会、2016 年、p. 228-234。
（3）Pierre Macherey, *À quoi pense la littérature ?*, Paris, Presse universitaire de France, 1990, p. 30.
（4）Axel Blaeschke, « Présentation », p. 56.
（5）この逆説に関しては、拙論« La musique sans paroles et la poésie traductionnelle : Autour de *Corinne ou l'Italie* », 『フランス語フランス文学研究』、2023 年、123 巻, p. 37-52、とりわけ p. 42-47 を参照。
（6）*De l'Allemagne*, p. 92.
（7）*De l'Allemagne*, p. 92-93.
（8）*De l'Allemagne*, p. 94.
（9）*De l'Allemagne*, p. 581.
（10）*De l'Allemagne*, p. 580.
（11）*De l'Allemagne*, p. 578.
（12）*De l'Allemagne*, p. 611.
（13）*De l'Allemagne*, p. 611-612.
（14）『実践理性批判』、p. 64.
（15）『判断力批判』、p. 118.
（16）*De l'Allemagne*, p. 565.
（17）*De l'Allemagne*, p. 601.
（18）*De l'Allemagne*, p. 604.
（19）*De l'Allemagne*, p. 607.
（20）*De l'Allemagne*, p. 607.
（21）*De l'Allemagne*, p. 659.
（22）Simone Balayé (éd), *L'éclat ou le silence : Corinne ou L'Italie de madame de Staël*, Paris, Honoré Champion, 1999 参照。
（23）*Corinne*, p. 263.
（24）『実践理性批判』、p. 353.
（25）『実践理性批判』、p. 64.
（26）『実践理性批判』、p. 188.
（27）『実践理性批判』、p. 188.
（28）『実践理性批判』、p. 188.
（29）*De l'Allemagne*, p. 671.
（30）『実践理性批判』、p. 194.
（31）*De l'Allemagne*, p. 674.

(32) *De l'Allemagne*, p. 674.
(33) *De l'Allemagne*, p. 674.
(34) *De l'Allemagne*, p. 674.
(35) *De l'Allemagne*, p. 659.
(36) *De l'Allemagne*, p. 674.
(37) *De l'Allemagne*, p. 780.
(38) プラトン（訳：脇條靖弘）『パイドロス』、京都大学学術出版会、2018 年、p. 48 などを参照。
(39) ヒューム（訳：田中敏弘）『道徳・政治・文学論集』、名古屋大学出版会、2011 年、p. 65.
(40) *De l'Allemagne*, p. 780.
(41) *De l'Allemagne*, p. 780.
(42) *De l'Allemagne*, p. 659.
(43) *De l'Allemagne*, p. 674.
(44) *De l'Allemagne*, p. 634-635.
(45) *De l'Allemagne*, p. 636.
(46) *De l'Allemagne*, p. 636.
(47) *De l'Allemagne*, p. 635.
(48) *De l'Allemagne*, p. 636.
(49) *De l'Allemagne*, p. 636.
(50) *De l'Allemagne*, p. 636.
(51) *De l'Allemagne*, p. 636.
(52) *De l'Allemagne*, p. 791.
(53) *De l'Allemagne*, p. 779.
(54) 実際にスタール夫人は『コリンヌ』でも人間の声をモデルとした器楽を描いている。拙論 « La musique sans paroles et la poésie traductionnelle : Autour de *Corinne ou l'Italie* », 『フランス語フランス文学研究』、2023 年、123 巻, p. 37-52、とりわけ p. 42-47 を参照。